

東京藝術大学特任助教

東京藝術大学

伊藤達矢

Tatsuya Ito

アートから始まる
オープンなコミュニティ。
とびらプロジェクトは何を生む？

東京都美術館

稲庭彩和子

東京都美術館学芸員

Sawako Inaniwa

9館もの文化施設がある東京・上野は、世界でも稀なミュージアムの集積地。その9館が連携し、「アートを紹介したコミュニティづくり」が行われている。東京都美術館と東京藝術大学が旗振り役となる「とびらプロジェクト」と「Museum Start あいうえの」だ。いったいどんな活動なのだろう？

photographs by Masaya Tanaka text by Kentaro Matsui



東京都美術館内で開催された「とびら」が全員集合する合同ミーティング「とびらステーション」。活発な意見が飛び交った。



ボランティアではなく、プレイヤー。

人々をつなげるコミュニケーションをどうやれば深めることができるのか、個々がプレイヤーとなって考え、実践しています。とびラーの基本となる活動は3つです。来館者と対話をしながら絵画を鑑賞する「対話による鑑賞」、障害のある方の鑑賞をサポートする「アクセス・プログラム」、東京都美術館の建物としての魅力を紹介する「建築ツアー」。そのうちの1つ以上は所属しながら「とびラボ」という自主的な活動にも参加します。「とびラボ」とは、誰かの「こんなことやりたい」というアイデアに仲間が集まり、集まったメンバー全員でできるプロジェクトを立ち上げる場です。これまでにいくつものプロジェクトが美術館で実施されました。

稲庭彩和子(以下稲庭) ユニークなプロジェクトばかりです。フェルメールの絵になりきり、写真を撮ってもらう「あなたも真珠の耳飾りの少女プロジェクト」

「ト」がとびラーから提案されたときは、驚きを超えて不安にさえなりました。美術館の活動としてはどうか、と(笑)。でも、体験してみるとなりきることは鑑賞体験として奥深く、さらには来館者に大好評で、その後神戸へ展覧会と一緒に巡回したほどです。とびラーの知恵が集まれば、学芸員が考える社会のなかでの美術館のあり方といった枠組みを超える、計り知れないジャンプ力が生まれることを実感しました。

とびラーにもさまざまな新規プロジェクトを練り上げていくのですが、そこで問われるのが「聞く力」です。年齢も職業も価値観も異なる多様な人たちが集まって一つのアイデアを実現しようとするときには、声の「大きな」人の発言よりも、誰かの「小さな」高い解像度で聞き取るように「聞く力」があるチームのほうが生産性が高く、有効なのです。ですから、とびラーの基礎講座では「聞く力」の大切さを伝えています。

東京・上野にある東京都美術館と東京藝術大学が手を取り合い、ユニークな活動を行っている。その名も「とびらプロジェクト」。2012年に東京都美術館がリニューアルする際に掲げた「アートを紹介したコミニティづくり」というコンセプトを実践するためのプロジェクトだ。一般公募によって選ばれた「とびラー」と呼ばれるプレイヤーが、学芸員や大学の教員とともに主体性を持って新規プロジェクトを提案し、実現に向けてディスカッションを重ねている。美術館を拠点にコミュニティをつくる「とびらプロジェクト」は何を目指すのか? 東京藝術大学特任助教の伊藤達矢さんと、東京都美術館学芸員の稲庭彩和子さんに伺った。

ソトコト(以下S) 東京藝術大学教授でもあるアーティストの日比野克彦さんが名づけたという「とびラー」の方々。どんな活動を行っているのですか?

伊藤達矢(以下伊藤) 正式には「アート・コミュニケーション」というのですが、とびらプロジェクトに関わる日比野さんが親しみやすい愛称をつけてくださいました。現在、とびラーは126名登録しています。会社員、主婦、デザイナー、学生、看護師、教員、区議会議員など職種もさまざま。いわゆる美術館のボランティアとして専門家をサポートするのはなく、美術館と



上/普段はプロジェクトごとに分かれて活動しているとびラーですが、互いのプロジェクトに対して多様な意見を出し合った。右下/意見やアイデアは記録に残し、掲出。左下/とびラーの約6割が20~30代。幅広い年齢層が集う。

母さん」と戻ってくるそうですが、このときは誰も途中で戻りませんでした。控室で待つ保護者からは「うちの子、まだ戻って来ない!」と思わず拍手が上がったとか。専門家だけが障害のある子どもをケアするのではなく、一般の大人(とびラー)もマンツーマンで本気で向き合い、関わり場をていねいにつくることで、障害のある子どもと深いコミュニケーションを取る事ができると気づかされ、希望が持てました。

伊藤 全6回のプログラムだったので、運動会と風邪で休むという連絡があった方以外はすべて出席。絵を鑑賞したり、アート体験が楽しいというだけでなく、子どもたちはきっと、とびラーに会いに来てくれたんだと思います。美術館という社会装置がソーシャル・インクルージョン(社会的包摂)に対して果たしている役割の大きさを感じました。



Tatsuya Ito x Sawako Inaniwa

S 今後、どのような展開を考えておられますか?

稲庭 「Museum Start あいうえの」には、上野にある9つの文化施設が連携する「コミュニティづくりを進めると」という大きな目標があります。上野は世界でも稀なミュージアムの集積地。東京都美術館と東京藝術大学が推進役となりながら、他の7館が共催というフラットな立場で有機的に連携することで、子どもも大人もともに学び合える環境を整備し、そこで生まれた新しい価値を社会に届けたいと思っています。伊藤 「Museum Start あいうえの」の「放課後の美術館」は、まさに他館との連携から生まれる子どもたちのためのプログラムです。例えば、東京都美術館で高精細複製品の「群鶴図屏風(尾形光琳)」を真近で鑑賞した後、隣の上野動物園へ行くと本物の真鶴を見る。江戸時代に描かれた屏風の鶴と、生きている鶴を5分の距離で見比べられるわけです。もう一度戻って「群鶴図屏風」を鑑賞すると、「この鶴、リアルに描いてあるようだからデザインされている」とか、「本物の鶴の目には毛が生えてない」と、子どもたちは絵と本物の鶴を比較します。また、屏風には金があしらってあるので、金を使っているのが、東京国立博物館に行くと鑑賞もできます。そうした広がりがある字びが、上野ではコンパクトに行えるのです。さらに、ほとんどの文化施設で中学生までが入場は無料。とびラーも一緒に入館して鑑賞します。振り返りの時間には、とびラーと子どもたちが感想を述べ合い、

価値の違いを結びつける、アートの力。

互いの価値観を共有します。S そんなふうに、子どもたちととびラーがコミュニケーションを深めるきっかけとして、アートは有効なのではないでしょうか?

伊藤 コミュニケーションとってお互いが理解し合うことのように聞こえますが、実はお互いの違いが浮き彫りになることだったりします。でもそこで「違うね、さようなら」ではなくて、その「違い」を了解事項として、まなざしを共有する力が今の社会では求められているのではないのでしょうか。そう考えた時、大人、子どもを問わず、また人種、年齢、性別、価値観さえも超えて、多様な人びとのまなざしを共有できるアートの存在は、現代社会の中でコミュニケーションの形成に大きな力を与えてくれます。とびラーと子どもたちのコミュニケ

S 「Museum Start あいうえの」は、どんなプロジェクトなのですか?

伊藤 ミュージアム9館が集まる上野公園を舞台とした、子どもたちのミュージアム・デビューを応援するプロジェクトです。13年8月から実施しています。プログラムの一つに、障害のある子どももいない子どもと一緒に絵画を鑑賞したり、造形活動をする「のびのびゆったりワークショップ」があります。とびラーと21名の子どもたちが、マンツーマンでターナーの絵を鑑賞しました。障害を持つ子どもは

マンツーマンで、障害のある子どもをケア。

美術館の展示室どころか、初めての建物に入ることさえ嫌がることもあり、親は美術館に連れて行きたくても足が遠のいてしまつとあっさりしてしまいました。ところが、このワークショップでは誰一人として拒否しなかったのです。障害児の専門家ではないとびラーたちが、子どもたちとのコミュニケーションの取り方を自分なりに考え、きちんと対話することで、子どもたちは展示会を楽しむという新しいことにチャレンジできたのです。

稲庭 普通は、何人かが嫌になって「お

ーションでも、そうしたアートの力が発揮されていると感じています。とびラーの任期は3年ですが、その後は自分の生活圏に戻り、小さな社会の編み直しをするアート・コミュニケータとしてのマインドを広げてもらえればと思います。それが、とびらプロジェクトの根底を目指しているところ。年に40名のアート・コミュニケータが果立っていくと、少しずつ社会が変わっていくのではないかと期待しています。

稲庭 卒業後は自分が住む渋谷区でこういう活動を始めたい」とおっしゃる方もおられます。

伊藤 活動と呼べなくても、ママ友として価値を共有するだけでも十分です。稲庭 親子のあいだでも、「参加して、自ら、文化や社会のつなぎ手になる」というとびらプロジェクトのコンセプトを、個々のコミュニティで実践してもらえればうれしいです。



上/「のびのびゆったりワークショップ」の参加者。海の中をイメージしてビニール傘に「みなも」を描いた。右下/マンツーマンで「ターナー展」を鑑賞。左下/「群鶴図屏風」を鑑賞する子どもたち。動物園の鶴と見比べると、絵を見る感覚が鋭くなる。

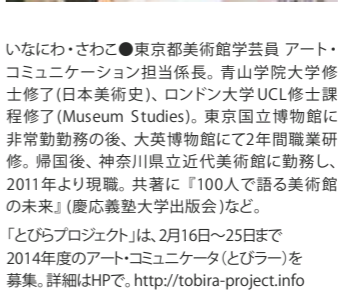
上/マウリッツハイム美術館展開催中に行われた「あなたも真珠の耳飾りの少女」プロジェクト。左下/ターナー展を見た印象を缶バッジに。下/紙芝居「ターナー島と伝説の船長」。これらはとびラーのアイデアから生まれた。



右左/マウリッツハイム美術館展開催中に行われた「あなたも真珠の耳飾りの少女」プロジェクト。左下/ターナー展を見た印象を缶バッジに。下/紙芝居「ターナー島と伝説の船長」。これらはとびラーのアイデアから生まれた。



いとう・たつや●1975年福島県生まれ。東京藝術大学美術学部特任助教、とびらプロジェクト、Museum Start あいうえのマネージャー。東京藝術大学大学院博士後期課程修了。博士号取得(美術教育)。福島県立博物館「岡本太郎の博物館・はじめる視点~博物館から覚醒するアーティストたち~展」の企画監修や、「福島芸術計画x Artsupport Tohoku-tokyo」企画・運営など、数々のアートプロジェクトを手がける。



いなにわ・さわこ●東京都美術館学芸員 アート・コミュニケーション担当係長。青山学院大学修士修了(日本美術史)、ロンドン大学UCL修士課程修了(Museum Studies)。東京国立博物館に非常勤勤務の後、大英博物館にて2年間職業研修。帰国後、神奈川県立近代美術館に勤務し、2011年より現職。共著に『100人で語る美術館の未来』(慶応義塾大学出版会)など。「とびらプロジェクト」は、2月16日~25日まで2014年度のアート・コミュニケータ(とびラー)を募集。詳細はHPで。http://tobira-project.info